



近代都市における盛り場と宗教施設：神戸新開地を事例に

高岡，麻希子

(Citation)

兵庫地理, 51:39-48

(Issue Date)

2006-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002454>



近代都市における盛り場と宗教施設

—神戸・新開地を事例に—

高岡麻希子

1. はじめに

(1) 問題の所在

近代都市における盛り場は、地理学や社会学など多分野から注目され、全国各地の盛り場の形成と系譜が解明されていった。特に社会学で盛り場を「恒常的に多数の匿名的な人びとが盛っていること」、つまり<出来事>と定義されてからは¹⁾、それまでの商業施設や土地利用等といったハードの分析に加え、そこに集う人びとの行動やイベントに注目するソフトの分析を含んだ、盛り場研究が進展した。地理学においても、大阪の旧市街地南部を対象にした著作²⁾や鹿児島市天文館地区を分析した論考³⁾などで、盛り場を<出来事>と捉えている。

ところで各地の盛り場の起源を追求すると、法善寺・竹林寺と隣接する大阪の千日前や、戦前の神戸の三宮神社境内とその周辺、東京の浅草など、宗教施設を原点に成立した場合や、神社境内などの宗教施設の敷地内が盛り場に変容した事例が多いことに気づく。それにもかかわらず、盛り場と宗教施設とを絡めた既往研究は、皆無に近い。劇場や映画館などの遊興施設や勧誘場などの商業施設が集積する盛り場にあつて、それらとは性格を異にする宗教施設は、そこで生起した出来事や人々の行動に少なからず影響を与えたはずである。

本稿の目的は、その相関関係が密接にもかかわらずこれまで等閑視されてきた、盛り場と宗教施設の関係を解明し、盛り場研究に新たな視点を提示することにある。本研究では、神戸・新開地と松尾稲荷神社を事例に取り上げるが、その理由は、神戸・新開地は明治末期、神戸市街地を二分していた湊川を埋め立てた土地に自然発生した盛り場であり、近代都市計画の一部として形成された大阪・新世界や、長い伝統を持つ東京・浅草のような盛り場とは異なる、比較的歴史の浅い都市空間であることにある。加えて、昨 2005 年は新開地が形成されて 100 周

年にあたり、盛り場・新開地の歴史を回顧するにふさわしい年でもあった。このような新開地の盛り場としての性格が、様々な系譜の中で現在も維持されていることから、近代に形成されたその実相を解明することには現代的意味が存する。

また、松尾稲荷神社は、新開地本通りから 500 m ほど南にある小さな社である。その由来は、旧湊川の堤防上にあつた楠正成ゆかりの松の木とその根元に祀られていた稲荷祠が松尾稲荷という社号になったと伝わる⁴⁾。現在の社殿は 1914(大正 3)年に造営され、祭神は稲倉魂神で線香をあげるといふ珍しい信仰を有し、縁結びの神様として花柳界の女性から、また商売繁盛の神様として新開地の商売人や相場師から手厚い信仰を集めてきた。

新開地周辺には湊川神社をはじめ、有名な寺社も多いが、松尾稲荷神社はそれらに比べてもかなり古い歴史を有する。盛り場が形成される以前からの対象地域を調査するにあたり、この神社によって、宗教と民衆との強固な結びつきを垣間見ることができると判断した。

以上のように、新開地と松尾稲荷神社は、民衆の行動や彼らが引き起こした事象に注目して盛り場研究を進める上で、ふさわしい事例である。

(2) 研究方法

戦前の神戸・新開地と松尾稲荷神社の実相を知る手段として、当時神戸で発行されていた新聞「神戸又新日報」(以下、又新と略す)と、対象地域を描いた記録やエッセー等の文献を利用する。

又新は 1884(明治 17)年 4 月 17 日に創刊された。1886 年頃、川崎造船所の創始者である川崎正蔵の子息、川崎芳太郎に資金を仰ぐこととなり、川崎の支配人であつた渡辺尚が出向して経営にあたつた。1896 年 10 月、渡辺は川崎正蔵に請うて又新を無償で貰うけて個人経営とした上で、川崎攻撃の立場を明らかにした。しかし 1898 年、川崎正蔵は松方

幸次郎や川崎芳太郎と謀って対抗紙として神戸新聞を発刊した。当初は順調な経営を続けていた又新だが、時代とともに神戸新聞の勢力が強まり、1936(昭和11)年10月2日付からは夕刊紙に切り替えた。そして、太平洋戦争の直前、国の一県一紙を建前とする新聞の統合政策によって、社告も無く1939年6月30日をもって廃刊となった⁵⁾。

一般に、新聞記事は「書き手の一方的な産物ではなく、読み手(=盛り場に多かれ少なかれ関わる人々)の需要に応じており、読み手の持つ社会的な意識を反映している」⁶⁾と言える。又新を資料に選んだ理由としては、神戸新聞が発刊される以前の対象地域に関する記事を利用できる点、また反川崎の立場をとっていたということで、当時の庶民の声や考え方などを読み取ることができる点を挙げうる。

新聞とは別に、新開地や松尾稲荷神社の周辺に居住していた人物による記述も考察する。具体的には、横溝正史の『横溝正史自伝的随筆集』、林喜芳の『わいらの新開地』、村島帰之の『わが新開地』である。

推理小説家・横溝正史は、1902(明治35)年、葉種商を営む両親のもと、神戸市東川崎町3丁目に生まれ、1925年江戸川乱歩を頼って上京するまで東川崎町に住んだ。その間の「卓越した記憶力で精緻に風俗を記した」⁷⁾東川崎町や新開地の記述をはじめ、作家としての半生などを綴った随筆が『横溝正史自伝的随筆集』である。東川崎町の町や住民の気質、松尾稲荷神社周辺の芝居小屋の描写に詳しく、盛り場・新開地と対比する上で参考になる記事が多い。

また、林喜芳は1908(明治41)年、神戸市東川崎町7丁目に生まれた。神戸市立楠高等学校を中退するまでそこで過ごし、その後しばらく市外に転出するが、その間を含めて彼の仕事場の多くは新開地とその限界であった。そのような生まれ育った町・仕事場・遊び場・憩いの場としての新開地の様子を綴ったものが『わいらの新開地』である。正月や祭の際の風習や出来事が詳述されており、当時の庶民の生活が活写されている。

村島帰之は、大阪毎日新聞の記者であった。彼が神戸支局に勤務していた頃、毎日のように通った、大正期の新開地を詳しく描写したのが『わが新開地』

である。通行人の数を通りに立って実際に数えたり、関係者のインタビューを掲載するなど、副題に「顕微鏡的研究」とあるとおり、その描写はたいへん細かい。芸妓の生活の実状や不良少年の実態など、新開地の“闇”の部分も描写されている。

2. 神戸新開地成立と発展

(1) 開港から湊川埋め立てまで

江戸時代尼崎藩領であった神戸村は、1867(慶応3)年の神戸港開港をきっかけに大変革をとげることとなる。開港に伴い、海外からの人や物の出入りが頻繁となり、神戸港付近には外国人居留地や雑居地が造成された。そして、外国人だけではなく、全国各地から多くの人々が仕事を求めて神戸にやってきた。このような人々の多くは港の荷役作業に就き、長屋や木賃宿、下宿屋などに集住するようになった。神戸市会は、1887(明治20)年に制定された「宿屋取締り規則」によって、下層民の住居を、長屋は橋通・川崎町・葺合、木賃宿は北長狭通1丁目・古湊通1～4丁目・今出在家町・新川と指定し、それ以外の場所からは排除する囲い込みを行った⁸⁾。これらの居住地域は、時が経るにつれて固定化、スラム化したのである。

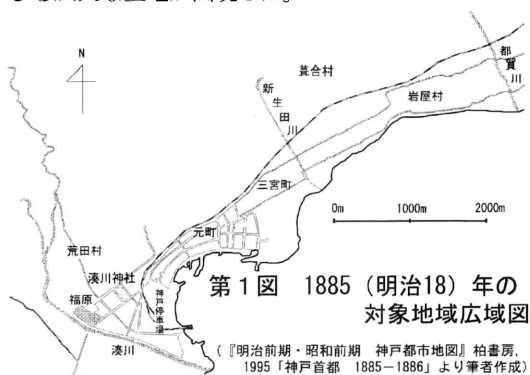
また、開港間もない1868(明治元)年には早くも遊郭の開設が許可され、現在の神戸駅の位置に福原遊郭が設置された。ところが、1871年、大阪―神戸間の鉄道開業に伴う神戸停車場の設置により、福原遊郭は開業からたった3年で移転を余儀なくされた。

第1表 戦前における新開地の系譜

年代	新開地における出来事	関連する出来事
1867 (慶応3)		神戸港開港
1868 (明治元)		福原遊郭開設の許可
1871 (明治4)		福原遊郭移転
1887 (明治20)		「宿屋取締り規則」制定
1896 (明治29)	湊川氾濫	
1897 (明治30)	湊川付け替え工事着工	
1901 (明治34)	湊川付け替え工事完了	
1905 (明治38)	旧湊川堤防埋め立て完了	阪神電気鉄道開通
1907 (明治40)	「相生産」湊川跡に移転	
1910 (明治43)		兵庫電気軌道開通
1911 (明治44)	湊川公園開園	
1913 (大正2)	「聚楽館」オープン・新開地駅	市電開通
1918 (大正7)		米騒動
1921 (大正10)	川崎争議団大デモ騒動	
1928 (昭和3)	御大典奉祝行事	
1933 (昭和8)	「みなと祭り」開始	
1935 (昭和10)	大楠公600年祭	
1945 (昭和20)		神戸大空襲

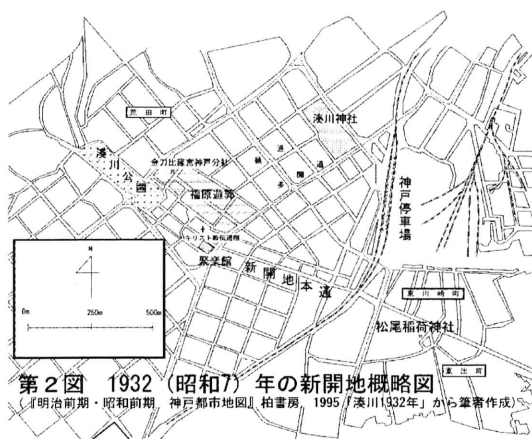
その代替地としてあてがわれたのが「湊川堤の東、西国街道の北手数町を離れた人跡絶えたる荒涼の地」⁹⁾、すなわち現在の福原町である。福原遊郭は盛り場・新開地の発展を語る上で欠かせない存在となったのである。

その頃、後に新開地となる地にはまだ湊川が流れており、しかもたびたび氾濫していた。湊川は普段は水無川で、川底の砂が見えていたが、その堤防は周囲の家屋の屋根よりも高い天井川で、一度氾濫すると周囲に大きな被害を及ぼした。明治期に入ってから、5度の水害に見舞われたが、特に1896(明治29)年8月の湊川氾濫はすさまじく、約60間(=約109m)にわたって堤防が決壊し、福原町・荒田町一帯は甚大な被害を蒙った。この水害は湊川付け替えの機運を高めさせ、翌年からの工事着工につながったのである。この工事は会下山をくりぬいてトンネル(湊川隧道)をつくり、そこに湊川の水を流して荻藻川と合流させ、新湊川として海へ流し、旧湊川は埋め立てるという難工事であった。そのため、工事は大幅に遅れた。多くの困難を乗り越えて、1901年2月には旧湊川から新湊川への付け替え工事が、1905年11月には、旧湊川堤防の埋め立て工事が完了した。これにより、湊川跡には、南北に伸びる広大な土地が出現した。



(2) 盛り場・新開地としての発展

湊川跡地は、若者の自転車遊びの場となったり、沿道に飲食店や見世物小屋などが並んだりしたものの、依然「ドテ」と呼ばれる荒地のままであった。その当時の神戸の代表的な歓楽地は、湊川神社の境内とその周辺であった。境内には香具師や飲食露店、



見世物小屋、和田岬から移転した水族館などが、連日賑わいを見せ、神社正門を南に下ったところには、神戸第一の劇場と言われた大黒座があった。このような歓楽地・湊川神社の周辺に存在していた劇場の一つに「相生座」があったが、1905年2月、公演中に全焼し、その2年後の1907年、新劇場を湊川跡地に再建することになった。この相生座の移転は神戸一帯に散在していた劇場や映画館、勸商場などが次々に湊川跡地に集積する契機となった。すなわち盛り場「新開地」¹⁰⁾の創出である。1905年開通の阪神電気鉄道をはじめ、1910年の兵庫電気軌道(現・山陽電鉄)、1913年の市電等、交通機関が次々と開通したことも背景として、新開地は確実に盛り場としての地位を確立していった。湊川改修工事中に先送りされた湊川公園は、1911年、ようやく神戸市による土地の買い上げが実現し、同年11月正式に開園した。さらに1913年には、「聚楽館」¹¹⁾がオープンした。その後、新開地は1918年の米騒動や1921年の川崎争議団大デモ騒動といった政治行動を含む都市騒擾の舞台となり、また映画と温泉が楽しめる湊川温泉や、東洋一の高さとうたわれた湊川公園内の神戸タワーなどの施設が次々に建設されて、一大盛り場が形成された。

しかし、第二次世界大戦の勃発は、娯楽場を次々と閉鎖に追いやり、1945年3月の神戸大空襲によって、湊川新開地付近は一帯焼け野原と化した。戦後は新開地の東側から神戸駅前にかけての土地が占領軍に接収され、「ウエストキャンプ」が設置される

などして復興の機会を失い、湊川公園には引揚者住宅が建ち並び、新開地はドヤ街に変貌していった。その間、娯楽施設のみならず、市役所などの行政施設までもが三宮に移転した。劇場や映画館、娯楽館、湊川温泉なども次々に閉鎖された。1968年、神戸高速鉄道が開通し、阪神・阪急・山陽の相互乗り入れが実現したが、これにより新開地駅は、単なる通過駅となってしまった。更に1995年の阪神淡路大震災では、新開地周辺も大きな被害を蒙った。

戦災と震災を乗り越えた現在の新開地は、かつての繁栄を失ったとは言え、昔ながらの飲食店や商店とボーリング場などの新しい施設が絶妙なバランスで混在し、ユニークな店舗や看板があちこちで見受けられる。また、大衆演劇場や競艇の場外発売所といった、中高年向け集客施設だけではなく、若者の芸術発信地として「神戸アートヴィレッジセンター」も開設され、三宮や元町とは異なった、かつての盛り場の歴史を利用したまちづくりが進展している。

確かに戦後の新開地は、戦前の栄華を失った。しかし現在の新開地には、若者から年配者まで街のどこかにそれぞれの居場所があり、盛り場の「文化の発信地」としての性格が今なお維持され、場所の個性が確立されているのである。

3. 言説に見る神戸新開地と松尾稲荷神社の系譜

(1) 神戸又新日報に描かれた松尾稲荷神社

神戸や新開地の歴史に関する文献の多くでは、湊川跡は相生座進出以前、特に人が集まるわけでもなく、閑散とした場所であったと記述されている。確かに、埋め立てが完了したばかりの湊川跡地は、夜になると夜盗や追いはぎのたぐいが出没し、通行人をおびやかしていたようである¹²⁾。新聞記事においても、「外人の神戸観」という記事の中で、この地域を「湊川の堤防は悪魔の棲家なり」¹³⁾としており、堤防にある多くの飲食店で、頼んでもいないのにビールや果物が出てくることを非難している。だがこの地域は必ずしも危険で寂しいだけではなかった。

湊川改修以前から、この地域には人が集まっており、この集客において、松尾稲荷神社が一定の役割を果たしていた。1886(明治19)年3月11日の「花

木植付の目論見」と題された記事では、旧湊川の様子を次のように報じている。

「松尾神社は従来靈驗特に著しとかへ参詣の人々は日々引き絶えず就中陽春の如きは最とも賑はくして参詣かたへ同堤上敷毛布等を打ち敷遊び戯むる人もあり(中略)同神社の辺は勿論此の堤上には年々数多の掛茶屋等も出づる事なれども…」

その後明治30年代の記事には、古くからの稲荷信仰の様子が描写されている。例えば、読者からの投稿「よせふみ」には、「相替らず施行々々野施行¹⁴⁾と騒しく毎晩鉦太鼓を敲き廻るが中には随分聞くも忌はしい醜行をやる組もあるさうだ 安眠の妨害ともなるが風紀上又相当の取締あるべき筈だ 夫れに放任されつあるは何故だらう」¹⁵⁾という意見や、「野施行ちゃへと我鳴って毎夜小さな竹の皮包みを路傍に置いて歩くさまはありや何です 野蛮妄信の行き止まりだ」、「松尾の稲荷さんへお詣りをする線香の煙でムッとするがまた其煙のまつ暗な堂の中で訳の判らん事を云つて唸って居る者があるが衛生には宜しくない話しだ」¹⁶⁾という意見があり、昔ながらの稲荷信仰を嫌悪する人もいたようである。

もっとも、「昨日の初午」という記事の中では、「土手の松尾稲荷の如きも僅かに幟提灯等を飾り付けたる位にて参詣者などは実に少なかりし由」¹⁷⁾とあり、この時点で初午を冬の一大イベントとして捉えていた様子はない。ところが、新開地が盛り場として歩み始めた明治40年代頃から、松尾稲荷神社の描写に変化が見受けられる。「昨日の初午」という題の記事では、「境外には覗き眼鏡や飲食店、菓子店の露店で流石に廣い空き地もギツシリー一杯になつている」¹⁸⁾、「初午と戎祭 初午と戎祭りの鉢合せ…何処も彼処も淋しいお祭」と題された記事では、「昨日から境内も掃き清め社殿には幔幕を廻らして用意万端、人を当て込んだ露店も相当に出た」¹⁹⁾、「初午めぐり」と表題の付く記事では、「御籤所には何の事たい、相生座と大黒座との芝居のビラがかかっていた」²⁰⁾とあり、初午が稲荷信仰の一行事から冬の娯楽イベントに変化していったこと、新開地との結びつきが始まったこと、またかつての信者に加え、遠方からより多くの参拝客を呼び込もうとする神社側と又新

側の姿勢が読み取れる。

このことは、阪神電鉄や兵庫軌道などが開通し、遠方からの参拝が容易になったことも深く関係している。例えば、同時期の又新では初午に限らず、阪神電鉄を利用して、西宮の十日戎への参拝を勧めている。汽車を増発させたり、運賃の割引券を新聞に掲載する力の入れようである²¹⁾。京都の伏見稲荷の二の午参拝も勧めており、祭期間中の臨時列車や割引乗車券の販売を報じている²²⁾。

大正中期には第一次世界大戦による好景気もあり、エンターテインメント性を含んだイベントとしての初午が民衆に定着したようである。新聞記事でも例えば、「奥殿に入ると参詣人でゴッタ返して居る。(中略)一本一銭の蠟燭お御籤、さてはお札・稲荷餅・赤飯が飛ぶやうに売れる」²³⁾、「猫の額のやうに狭い鳥居前に飴、関東炊、おでん、豆板などの子供の喜ぶ露店が所狭しとご陣取り 開運のお守札やお御籤受けて社務所前は混雑し(中略)兎に角お祭らしい賑ひであつた」²⁴⁾ などとある。また、1914年2月1日付の記事「初午祭」では、当時人気の歌舞伎俳優・尾上梅幸によって初午の風習が紹介されているが、その内容はある石鹸会社の広告である。同様の記事は翌年の同時期にも見受けられる。更には「舞台の初午祭▽喜劇式大黒座の夜」²⁵⁾と題された記事では、湊川神社前の劇場・大黒座で、初午を祝う特別な舞台が催されたことが報じられている。このように、初午は単なる稲荷の祭から企業の宣伝や演劇場の演目に利用されるに至ったのである。

更に1921年からは毎年、新聞に小さな初午の広告が載せられ始める。また又新では、新開地が盛り場として発展し始めた頃からほぼ毎年、初午の記事を写真も添えて掲載しており、初午をこの地域の年中行事の1つとして定着させようとした又新と松尾稲荷神社の意図が看取できる。

また、1913年2月6日付の「初午前記」には、「小一位稲荷大明神と書いた赤白の幟を押して十二三を頭の子供等が隊を組んで『お稲荷さんのお祭ちゃ蠟燭一本上げてんか』と家毎を廻ったのは十年昔の事、今ではソウ云ふ風習は見られなくなった」とあり、湊川埋め立てが完了した頃から初午時の風習も

変化している。湊川埋め立てと新開地の盛り場化は松尾稲荷神社や稲荷信仰にとって、変革の大きなポイントであったことが明らかである。

ところで、松尾稲荷参拝の客層の約半数を占めていたのは、福原遊郭の芸妓や仲居たちであった。松尾稲荷神社は商売の神様・縁結びの神様として信心され、本殿の天井には芸妓や商売人たちから寄進された「煤け返つた提灯が数へ切れぬ程ブラ下がり」²⁶⁾、松尾稲荷神社は「提灯もちのお稲荷さん」²⁷⁾と呼ばれていた。戦前、着飾った芸妓達が参拝する様子は、松尾稲荷神社の風物詩となっており、又新日報には、芸妓達が艶やかな着物姿で参拝する様子を写した写真がしばしば掲載されていた。一方で、芸妓達以外の参詣人は「寝ネネ子で子供を背負つてのや半纏着裏店の妻君等で他と比べると一段見劣りがする」²⁸⁾ ようであった。これは、湊川神社が維新の原動力となった楠正成を祭神とし、明治天皇の神社創祀の沙汰で1872年に建立された日本初の別格官幣社であるのに対し、松尾稲荷神社は祠の歴史が南北朝時代以前にまで遡れる、古い宗教施設であることと関係している。湊川神社内にも楠本稲荷神社という稲荷神社があるが、その初午祭の新聞の描写は「新築の稲荷だけに綺麗で総てが新規だ、(中略)お供物には何何時計店の料理店のと筆太に献納者が広告してある、何処迄も抜目がないヨ」²⁹⁾ というように、よそよそしさが感じられる。

松尾稲荷神社と湊川神社の性格の違いは、松尾稲荷神社にビリケンが奉納された経緯にも現れている。このビリケンは、1910年代初めにアメリカの船員から持ち込まれたビリケンを見て、元町の洋食店主が見よう見まねで「福の神」として作ったものである。ところが店先に置いたビリケンに人が群がるばかりで肝心の商売はさっぱりうまくいかず、海へ流そうとしたものを松尾稲荷神社が引き取ったのである。

このように、松尾稲荷神社の主な参拝客は福原の芸妓達と庶民で、湊川埋め立て以前からこの地域の集客要因となっていた。そして、湊川が埋め立てられ、新開地が盛り場として歩み初めた頃から、初午や神社の新聞記事での描かれ方が変化し、松尾稲荷は古い信仰体系を残す稲荷神社からエンターテイメ

ント性にあふれた歓楽的な場と描写されるようになった。また松尾稲荷は、境内に新開地の劇場のビラが貼られるなど、盛り場・新開地との関係を志向していた。更に、新聞によって伝えられたイベントとしての初午を劇場などが利用するようになり、松尾稲荷やその祭である初午は更にエンターテインメント的要素を色濃くしていくのである。

(2) 住民が記述した松尾稲荷神社と新開地

前述のように、松尾稲荷の主な参拝客は福原遊郭の芸妓達であり、この神社が一日のうちで最も賑わったのは新開地や福原が閉じる夜更けであった。これら福原遊郭の芸妓・仲居といった「色分衆」は、一日の参拝客約 1000 人のうち実に半数を占めた³⁰⁾。

ところで、村島は新開地を行き来する人の流れを、福原遊郭の芸妓・仲居衆を中心とした女達を指す「赤き流」、朝夕に大通りを通過する川崎造船所の職工達を指す「青き流」、新開地の闇を縫う不良少年や香具師達を指す「黒き流」の3つの流に分類している³¹⁾。松尾稲荷はこれらのうち、「赤き流」を生み出す一要因になり、新開地の一日の人の流れを締めくくった。

松尾稲荷は「新開地の繁栄も(山陽本線のトンネルの)南側まで及ぶことはなかった」³²⁾ 東川崎町・東出町一帯において、新開地成立以前からの唯一の集客地であった。幼い横溝正史が好きであった娘剣舞一団の芝居小屋や、松尾座・稲荷座という名の劇場が湊川堤防の埋立地に建っていたこともあった。そこには露店も建ち並んでいた。松尾稲荷神社一帯は、信仰の場に加えて歓楽的な場であったと言える。

また、新開地本通りから続く道筋には、薬種商を営んでいた横溝家のように、朝と夕方に大通りを群れとなって通過する「青き流」や、新開地を訪れる民衆を主な客層とした商店が軒を連ねていた。横溝は自分の家の位置を「職工さんの大半は、わが家のまえを通って往復するのである。したがって朝と夕方は広いわが家のまへの道は人並みで溢れ、夜ともなれば新開地へ遊びにいくひとたちで、やはり溢れんばかりで、薬屋にしろ何商売にしろこのうえもない格好の場所であった」³³⁾と描写している。このような商店は、「湊川新開地という盛り場をすぐそばにひかえて」「夜は十二時過ぎまで店を開けていなければ

ならず」³⁴⁾、自然と夜更けの松尾稲荷神社への参拝客にも対応していたはずだと考えられる。つまり、盛り場・新開地や川崎造船所だけではなく、松尾稲荷が近くにあることによって、新開地から続く通りの商店は商いを維持できたのである。

新開地の商人たちが、参詣客の絶えない松尾稲荷を商売に利用しないはずはない。新開地には祈祷師がいたし、「大正から昭和の戦後まで新開地のあちこちに、(稲荷の神様の使いである狐に辻占の紙を選ばせる)狐の辻占屋が多くの人を集めていた」ようである。また、「このお稲荷さんのご利益をそのまま受けたのが辻占屋で」あり、「新開地筋を右に折れる小路、ここが稲荷社殿への近道とあって、この三十米ほどの狭い小路に、人は渦巻いて歩めぬほどの有様」³⁵⁾であった。ちなみに、新開地の辻占屋は、生駒山の瓢箪山稲荷神社で見られた辻占い³⁶⁾ではなく、男女の名前を書いた紙の裏にそれぞれ文句を記したものを選んだり、多くの紙のうち、1枚をキツネに選ばせたりといった、いわゆる辻占売りであった³⁷⁾。

辻が霊と関係を持つ場であったことはよく知られているが、そこで霊や神と交信し、未来を知ろうとしたものが本来の辻占であったようだ。しかし、近代化が進み、神や霊に対する畏敬の念が薄まるにつれて本来の辻占の意味が失われ、商売色の強いものになっていった³⁸⁾。商売色の強い新開地の辻占に、霊などの神秘性はほとんど感じられない。だが、稲荷の象徴である狐を使って松尾稲荷との関係をつくらうとする辻占屋の行為には、商売目的とともに、辻占や新開地の辻に神秘性を持たせようとする意図が見てとれる。客のほうも、本気で当たると思って辻占を買っていたわけではなく、線香と蝋燭の煙で朦朧とした松尾稲荷神社の持つ独特な雰囲気と辻占の娯楽性を同時に味わっていたのだろう。さらにこれら辻占屋は、初午などの祭だけではなく、日常的に开店していたことから考えると、松尾稲荷に、恒常的なエンターテインメント的性格を与え、人々を集める「夜更けの盛り場」に変容させたといえる。

また、『偵が安い』といふ事が、何より必要なこと」³⁹⁾であった新開地は、庶民にとって気軽に訪れ、楽しめる場所であったと言えるが、同様に、松尾

稲荷も庶民にとって参詣しやすい神社であった。その理由の1つに、松尾稲荷が東川崎町の向かい、東田町にあることが挙げられる。横溝の描写によると、東川崎町は「面白いといえば面白いが、貧しくて柄が悪く、殺伐な町」⁴⁰⁾で、川崎造船所の職工や下請工場の労働者、日稼ぎ労働者の下宿屋、その人たちを相手にする女たち、新開地から客をくわえこんでくる「高等淫売」と称せられる女たち、また、横溝家のように、それらの人々を対象とした商売人らが住むところであった。これは、横溝正史と林喜芳の母校であり、松尾稲荷神社と湊川跡を隔てたほぼ向かいに位置していた東川崎小学校が「名だたる貧乏生徒の学校であり、通称しんでん（新田）がっこと呼ばれた」⁴¹⁾ことから想像に難くない。その東川崎町と湊川跡を隔てたところに松尾稲荷神社は鎮座しているのである。大正中頃からは「新開地の松尾稲荷」⁴²⁾と、松尾稲荷神社周辺までも新開地に組み込もうとする動きが見えるが、実際は賑やかな新開地や艶やかな福原とはかけ離れた神社であった。

そして、東川崎町に限らず、新開地は下層民の居住地と隣り合わせであった。「細民長屋と水上生活者の住む町、それが新開地では『客』であったし、『ここに来ればええし（良い衆）も貧乏人も区別がない』⁴³⁾」⁴³⁾。神戸市は1894年の日清戦争まで緊縮財政をとっていた。そのため、神戸市会は下層民を一定の地域に住まわせ、他の市民から隔離した。1890年の恐慌時には、新開地に隣接する荒田町や東川崎町・橋通・北長狭通・相生町・和田崎町に13,000人の下層民がいたとされる⁴⁴⁾。明治中期からの産業革命と貿易の発展は、労働者の神戸流入を更に加速させた。1900年には、荒田町3丁目に「神戸労働株式会社」なるものができた。これは、1,000人の労働者を集め斡旋することを目的として、人夫の寄宿舎を建設し、当時200人前後の労働者が寄宿していた。また、福原遊郭の娼妓や芸妓たちも多くは日本各地から売られてきた人たちである。「一見華やかに見える彼女らも、花代から手間賃や店主への衣装代や税金などの借金を少しずつ返済すると、懐具合は火の車であった」⁴⁵⁾。

このように、相生座が進出して盛り場・新開地が創

出された1907年までには下層民の集住地は、ほぼ形成されていたことになる。このような人びとは、前述の日露講和反対騒擾や米騒動といった、湊川神社や新開地を舞台とした都市騒擾の主人公となった。盛り場という不特定多数の人が集まる場所で、世間への不満が増幅し、騒擾を煽じる新聞や参加を呼びかける張り紙をきっかけにそれが爆発したのである。

4. 盛り場形成と宗教施設の関係

(1) 宗教施設のもつ役割

宗教施設の役割として最も大きいものは、信仰である。特に松尾稲荷の場合、「他の何れの社会の人々よりも、遥かに深い迷信を持つ」⁴⁶⁾花柳界の人々を中心に、熱心な信者を多数抱えていた。初午の際にしても、「貸座敷置屋劇場等の大きいところは特に此初午祭を盛大にする慣例があり、抱え妓雇人等を集めて酒盛りを催し騒ぎ立て」⁴⁷⁾、一般の人以上に稲荷への思い入れが大きかった。また湊川埋め立て以前は、堤防の上から宮までたくさんの鳥居が建ち並んでいて⁴⁸⁾、昔から多くの信者を集めていた。

霊験あらたかなことが知れ渡り、参詣客が増えると、彼らをターゲットにした露店や芝居小屋などができ、宗教施設に歓楽的要素が加わるのである。前述の娘剣舞は「松尾稲荷のその場所へくると、ご当所を当てこんでであったろう、必ず楠公の子別れと湊川合戦が出」⁴⁹⁾ていたし、辻占屋は狐を使って客の興味を誘い、他の宗教施設の歓楽的要素との差異化をはかっていた。このように、香具師や占い師は神社の性格を利用して客を呼び込み、松尾稲荷周辺にとどまらず、新開地方面にまで進出していた。

つまり、松尾稲荷神社周辺は「信仰」という、宗教施設の最も大きな役割を利用して人を集め、歓楽的な場として次第に発展した。その歓楽的な場は、本格的な盛り場形成に必要な一つの要素となり、エンターテインメント性を盛り場に提供したのである。大槻が指摘するように、松尾稲荷神社だけではなく、湊川神社や三宮神社など、新開地以前の神戸市内の興行施設があった場所は、ほとんどが寺社の近辺に位置していた⁵⁰⁾。すなわち松尾稲荷神社と新開地について確認した盛り場と宗教施設の関係が、他の宗

教施設にもあてはまる。

松尾稲荷の人気は第一次世界大戦後の不況時にも衰えることはなかった。1918（大正7）年頃から新開地の露店景気が悪くなり始め、その年の又新には警察が店主に立ち退きを命じた記事⁵¹⁾や、露店の風俗や衛生の改善を求める記事⁵²⁾が見える。それでも庶民のまち・新開地ではなんとか売り上げを確保したが、比較的富裕な層を商売相手とした福原遊郭は相当な不景気であったと考えられる。しかし、1921年2月13日付の記事には、芸妓たちが装って参拝する様子が写真で報じられている。彼女らの松尾稲荷への信仰心は、不景気でも揺らがなかった。

（2）時代の果たした役割

近代は政治から日常生活に至るまで、大変革がなされた時代である。その変革に飲み込まれた当時の人々には、大きな不安や不満があったことは想像に難くない。大槻が指摘するように、新開地には大通りの北端に湊川公園、南端に川崎造船所があり、「公園と大工場という、多くの民衆を擁し、近代都市を構成する上でも重要な二つの空間を一直線に結」んでいる⁵³⁾。特に、川崎造船所の正門は新開地の中心街路を海側に伸ばした突き当たりを開いており、新開地と空間的に密接な関係が見られる⁵⁴⁾。湊川公園にしても、旧湊川が埋め立てられた土地の一部を神戸市が買い取って開園するという近代の都市計画に沿ってできたものであり、その主な人口は新開地の中心街路に向けられた。松尾稲荷神社もこの2つの空間の間に位置している。これらの空間とその間にできた新開地は、盛り場としての地位をゆるぎないものとするにつれて、松尾稲荷の知名度を近代以前と比べ、飛躍的に高めた。

更に新聞というメディアの発展が、これに拍車をかけ、都市公園と工場、情報メディアという、近代に新しく登場したものが、松尾稲荷という前近代的存在を広く知らしめた。このため新開地は明治後期に形成された盛り場でありながら、近世的要素を持ち合わせていた。吉見は、江戸の盛り場では、見世物小屋や大道芸人、水茶屋がひしめき、周辺に乞食や私娼が出没していたという。しかし明治以降、見世物や大道芸の取り払い命令により、博覧会的な新

しいタイプの盛り場へと道を譲ったと指摘し、その典型的な例として、両国を挙げている⁵⁵⁾。新開地の系譜を追うと、香具師や露店商は日常的に新開地に存在していたし、周囲の下層民の居住地には私娼や乞食もいて、新開地は近世的盛り場の雰囲気も持ち合わせていた。すなわち映画館や劇場などの興行施設と飲食店や勸商場などの商業施設が立ち並ぶ近代的な盛り場の中で、近世の盛り場の風景も維持していた。このような意味で、新開地は両国や銀座のような盛り場とは異なり、浅草と似た性格を持っていた。「この時代（明治末から大正）の浅草の本質は、活動写真や浅草オペラに代表される『モダン』な要素と、観音堂を中心とした『伝統的』な要素が混然一体となったところ」にあり、「そこには乞食や売春婦や不良少年も抵抗なく溶け込んでいける空間がある。」そして、「浅草は、これら下町の下層民たちに手頃でしかもこの上なく魅力的な盛り場として感じられていたことであろう」⁵⁶⁾という吉見の指摘は、新開地のあらゆる性格と驚くほど一致している。

ここで新開地が近世的盛り場の性格を維持することが可能だった理由を考えてみる。それは「庶民のまち」という新開地の性格の中に、吉見が示すく浅草なるもの⁵⁷⁾と同じものが含まれていたからであろう。具体的には、①ありとあらゆる種類のヒトやモノを受け入れ、それでいておのれの独自性を失わない、強烈な消化能力、②次から次へと新しいドラマが繰り広げられていく空間の先取り性、③人も、また出来事も無限に変幻自在な顔を持っていたこと、⁵⁸⁾である。それらを新開地に即して考えてみると、①次々と新しい見世物や商品が紹介されそれが受け入れられていること、②新開地の辻では昼間には香具師や露店商が立っているとと思ったら、夜には同じ場所でキリスト教の伝道が行われているという流動性、③金持ちも貧乏人も関係なく、楽しめる空間であること、それぞれに該当する要素が存在する。そして、そのような街の様子を報道する情報メディア（＝新聞）の存在があった。

また、松尾稲荷は盛り場・新開地が持つ公園や工場などの都市機能、その様子を報じる情報メディアの力を借りてその存在を広め、エンターテインメント

の性格を強めていった。だが、松尾稲荷は自身のエンターテインメント性を高めると同時に、新開地との空間的近接性を利用して、新開地を単なる近代の盛り場とはせず、同神社周辺が有する近世の盛り場の要素を与えたのである。

（３）松尾稲荷の聖と俗

前述のように、稲荷信仰は多様である。特に松尾稲荷においては、その信仰体系や参詣客層を見る限り、神聖さは重視されない。むしろ、ビリケンという「世俗的」なものを引き取り、あらゆる祈願を受け入れる万能福の神、「松福様」になってしまうほどだ。そこで盛り場・新開地の性質と照合してみると、芸妓仲居衆・香具師や芝居小屋・露店・ビリケンなどの「俗」を受容し、ビリケンに至っては「聖化」するという、松尾稲荷の多様性と寛容さが、不特定多数の人々が集う盛り場・新開地の性格に一致しているのである。そして、南北を大王場と近代の公園で挟まれた新開地本通りから続く道の、すぐ西手という松尾稲荷神社の空間的配置が、新開地からの人の流れを可能にし、逆に松尾稲荷からは俗な信仰要素を含む狐の辻占や、新開地形成以前の劇場といったアミューズメント機能を新開地に提供したのである。

大槻は、新開地が歓楽街として成立する以前の神戸の歓楽的な場の１つとして、松尾稲荷神社周辺を挙げている。その後、盛り場・新開地の形成により、神戸各地に散らばり、常設営業のできる土地を求めていた興行施設が急激に新開地に集積し、大正中期には、わずかに三宮神社周辺が独自の歓楽的な場を維持していた、と指摘している⁵⁹⁾。確かに、劇場などの興行施設は新開地に集まったが、それにより、かつての歓楽的な場の「賑わい」までもが新開地に移っていったとは言い切れない。少なくとも松尾稲荷においては、湊川跡に建っていた出店が集まって東隣に市場が形成され、辻占屋には人がひしめきあい、参詣客は絶えなかった。深夜にやっと仕事を終えることのできる花街の女性や板場、芸者達にとって、松尾稲荷神社界隈は「夜更けの盛り場」であり、昼間は娯楽や享楽を提供する立場の彼らが、それらを楽しむつかの間のひとときを与えていた。

すなわち、松尾稲荷神社は信仰という、本来なら

ば「聖」的な性質を持つ要素を利用して集客をしたが、より多くの参拝客を取り込んでいくにつれて、次第に境内やその周辺は露店や辻占屋、劇場などが並ぶ「俗」な場所に変化していった。俗な要素を強めた松尾稲荷神社は盛り場・新開地と結びつきを強め、劇場などのアミューズメント機能を新開地に提供し、逆に新開地の主要な人の流れである「赤き流」を引き寄せ、「夜更けの盛り場」と化したのである。その間、ビリケンを神様にするなど、松尾稲荷の信仰そのものも「聖」から「俗」へ変容していった。

５．おわりに

以上、松尾稲荷神社が盛り場・新開地の形成にかなりの影響を及ぼしたかについて、盛り場を吉見のように新聞記事や文献に記されたことも含めてく出来事>として捉え、たどってみた。その結果、松尾稲荷は、新開地との空間的關係、稲荷という雑多な信仰体系、不特定多数の人々が集うという盛り場の匿名性、近代という時代の変化を通して、盛り場・新開地の形成とその特性に深く関与し、また、松尾稲荷自身も、盛り場・新開地の性質を利用して、賑わいを維持したことが明らかとなった。

本稿では松尾稲荷神社と盛り場・新開地形成の關係について取り上げたが、新開地周辺にはキリスト教伝道館や金刀比羅宮神戸分社、湊川神社など、他にも多くの宗教施設が存在する。これら他の宗教施設と新開地との關係を解明することが課題となる。

また、今回は盛り場のエンターテインメント性や対象地域の空間的關係を中心にまとめたが、盛り場に集う様々な人たち—例えば、川崎造船所の職工、日雇い労働者、芸妓仲居衆、商売人、不良少年少女、下層民—の社会的属性に合わせて、それらの人々と盛り場や宗教施設との關係を探るという方向性もある。そのためには、神戸新聞などを含めた更なる新聞記事の精査や、可能ならば当時を知る人に聞き取りをすることも必要であろう。それらの情報を、<出来事>として盛り場を捉えていく中で、どう利用していくのかも、今後の課題としたい。

付記

本稿は、神戸大学文学部に提出した 2005 年度卒業論文を大幅に改稿したものである。本稿をまとめるに際し、神戸大学文学部の長谷川孝治教授から指導を受けたことに対し、感謝いたします。また 2005 年に形成 100 年を迎えた新開地の今後の発展を心よりお祈りいたします。

注

- ¹⁾ 吉見俊哉(1987):『都市のドラマトウロジー』弘文堂, 24 頁。吉見の指摘する<出来事>とは、政変などの政治的事件だけではなく、人びとの日常生活において、盛り場で起こる些細な事柄も含む。
- ²⁾ 加藤政洋(2002):『大阪のスラムと盛り場―近代都市と場所の系譜学』創元社。
- ³⁾ 前屋敷史子(1997):『新聞記事にみる盛り場の歴史的変容―第 2 次世界大戦後の鹿児島市天文館地区を事例に―』歴史地理学 39-4、25-33 頁。
- ⁴⁾ 『松尾稲荷神社由緒記』より。
- ⁵⁾ 神戸市編(1965):『神戸市史第 3 輯 社会・文化編』803-815 頁。
- ⁶⁾ 前掲 3) 26 頁。括弧内は前屋敷による。
- ⁷⁾ 新保博久(2002):『正史もまた永遠にして不滅である』(横溝正史『自伝的随筆集』角川書店, 301-307 頁。
- ⁸⁾ 村田誠治編輯(1898):『神戸開港三十年史 下巻』629 頁。
- ⁹⁾ 加藤政洋(2005):『花街 異空間の都市史』朝日新聞社, 201 頁。
- ¹⁰⁾ 湊川跡地は川を埋め立てて「新しく開いた土地」という意味で、いつしか「新開地」と呼ばれるようになった。
- ¹¹⁾ 娯楽館は東京の帝国劇場を模した演劇場としてオープンし、後に映画館やスケート場となり、1978(昭和 53)年の閉館まで新開地のシンボルとして親しまれた。
- ¹²⁾ のじぎく文庫編(1973):『神戸新開地物語』、21 頁。
- ¹³⁾ 又新 1901 (明治 34) 年 4 月 24 日付。
- ¹⁴⁾ 野施行とは、寒中に狐や狸に餌を分け与えてやることで、狐や狸に対する信仰の現れの 1 つである。
- ¹⁵⁾ 又新 1902 (明治 35) 年 2 月 4 日付。
- ¹⁶⁾ 又新 1904 (明治 37) 年 2 月 2 日・11 日付。
- ¹⁷⁾ 又新 1901 (明治 34) 年 2 月 11 日付。
- ¹⁸⁾ 又新 1909 (明治 42) 年 2 月 28 日付。
- ¹⁹⁾ 又新 1910 (明治 43) 年 2 月 11 日付。
- ²⁰⁾ 又新 1911 (明治 44) 年 2 月 6 日付。
- ²¹⁾ 又新 1908(明治 41)年 2 月 7 日付。
- ²²⁾ 又新 1907 (明治 40) 年 2 月 11 日付。
- ²³⁾ 又新 1918 (大正 7) 年 2 月 5 日付。
- ²⁴⁾ 又新 1919 (大正 8) 年 2 月 12 日付。
- ²⁵⁾ 又新 1916 (大正 5) 年 2 月 5 日付。
- ²⁶⁾ 又新 1909(明治 42)年 2 月 28 日付。
- ²⁷⁾ 前掲 12) 91 頁。
- ²⁸⁾ 前掲 26)。
- ²⁹⁾ 又新 1911 (明治 44) 年 2 月 6 日付。
- ³⁰⁾ 村島綿之(1922):『わが新開地』文化書院, 66 頁。
- ³¹⁾ 前掲 30) 62 頁。

- ³²⁾ 横溝正史(2002):『自伝的随筆集』角川書店, 105 頁。
- ³³⁾ 前掲 32) 106 頁。
- ³⁴⁾ 前掲 32) 143・34 頁。
- ³⁵⁾ 林喜芳(2001):『わが新開地』神戸新聞総合出版センター, 32・88 頁。
- ³⁶⁾ 清水夏樹(1985):『中小社寺個別例 瓢箪山稲荷神社』(宗教社会学の会編『現代都市の民俗宗教 生駒の神々』創元社, 所収) 194 頁。
- ³⁷⁾ 前掲 35) 87-89 頁。
- ³⁸⁾ 笹本正治(1994):『辻についての一考察』(宮田登・塚本学編『日本歴史民俗論集 10 民間信仰と民衆宗教』吉川弘文館, 所収)167-201 頁。
- ³⁹⁾ 前掲 30) 45 頁。
- ⁴⁰⁾ 前掲 32) 79 頁。
- ⁴¹⁾ 前掲 35) 44 頁。
- ⁴²⁾ 又新 1921(大正 10)年 2 月 13 日付。
- ⁴³⁾ 前掲 35) 156 頁。
- ⁴⁴⁾ 落合重信(1975):『神戸の歴史―古代から近代まで―』後藤書店, 238 頁。
- ⁴⁵⁾ 前掲 30) 70 頁。
- ⁴⁶⁾ 前掲 30) 70 頁。
- ⁴⁷⁾ 又新 1913 (大正 2) 2 月 6 日付。
- ⁴⁸⁾ 前掲 12) 91 頁。
- ⁴⁹⁾ 前掲 32) 43 頁。
- ⁵⁰⁾ 大槻洋三(1997):『神戸・新開地の空間形成と娯楽街成立の契機 近代都市の娯楽街形成に関する史的研究 その 1』日本建築学会計画系論文集 第 496 号, 193-200 頁。
- ⁵¹⁾ 又新 1918 (大正 7) 年 1 月 16 日 17 日付。
- ⁵²⁾ 又新 1918 (大正 7) 年 10 月 24 日付。
- ⁵³⁾ 大槻洋三(1998):『神戸・新開地の娯楽街空間の実態とその変容 近代都市の娯楽街形成に関する史的研究 その 2』日本建築学会計画系論文集 第 507 号, 207 頁。
- ⁵⁴⁾ 前掲 53) 207 頁。
- ⁵⁵⁾ 前掲 1) 153-164 頁。
- ⁵⁶⁾ 前掲 1) 208・209・218 頁。
- ⁵⁷⁾ 前掲 1) 209 頁。
- ⁵⁸⁾ 前掲 1) 209-212 頁。
- ⁵⁹⁾ 前掲 50) 198 頁。

文献

- 橋爪紳也(1990):『明治の迷宮都市 東京・大阪の遊楽空間』平凡社。
- 新修神戸市史編集委員会(1994):『新修神戸市史 歴史編Ⅳ 近代・現代』。
- 和田克己(1997):『むかしの神戸 絵はがきに見る明治・大正・昭和初期』神戸新聞総合出版センター。
- 加藤政洋(1999):『明治中期の大都市における地区改良計画とその帰結 大阪「長町」を事例として』歴史地理学 41-3、21-39 頁。
- 東川崎歴史の会(2004):『横溝正史と東川崎町』。
- (たかおか まきこ 神戸大学文学部・学生)